

歌え！

＝ 後日談 ＝

「れでいーすえーんどじえんとるめーん！」、「紳士淑女の皆様！」

「今日は、この前晴れてチームの仲間入りをした！」、「葬屋、颯火、琴樹の歓迎会！」

「れっつ えんじょいカラオケ！」

スピーカーをキンキン言わせながら、風刃と雷人は叫んだ。

ここは、ニアラの某カラオケボックス。この前のチームに入れられることとなった

葬屋と颯火を引っ張って、音斬の二人と蒼慈、皐月と鶯の七人でやつ来たのだった。

なんだかまた、無音な文章の上でやるのにふさわしくない状況である。

懲りないから！

で、当の葬屋と颯火はというと、

「歓迎会って…こんなこと祝われたくねえよ」

「めでたいのはお前等の頭で十分なんだよ…」

ソファの隅でげっそりしていた。なんかきのこ生えてきそうなテンションである。

祝賀ムード、無し。

しかし、そんな大雨注意報の出ている二人はガンスルーで、音斬を筆頭に既に曲選

びにはいつていた。ただ、鶯だけが同情するような視線を送っているのみである。

それが、チームクオリティ。基本状態、カオス。

「あの一、そういうえば、琴樹さんがいないみたいなんですけどー」

「ああ、あの猫かぶりな。なんか、『凜がいないところに行くなんてエネルギーと時間

の無駄なのでパス』とか言って欠席してるぞ」

おすおすという蒼慈に、何とでもないように答える皐月。その言葉に反応したのは、

湿度八パーセント地帯の葬屋と颯火。

「んだと、あんのヤロウ！ 一人だけ逃げやがって！」

「つか、何で俺達は無理やり連れてこられたのに琴樹はそんなに放置なんだよ！」

「ほら、人の恋路を邪魔する奴は馬に蹴られて死ぬじゃないか」

「じゃあ、人生を邪魔する手前らは悪言に食われて死ぬ！」

「何を言うか、自業自得だろつか」

「うるせえよ！」

「悪かったな！」

結果、ただの逆ギレだった。

「ああもういいよ、開き直ろっせ、葬屋！」

「そうだな、颯火。もうウジウジ言っても何もかわらねえもんな！」

「そうだ！ そうだ！」「その意気だ、二人とも」

「ことうわけで、バンドやらないかッ！」

「やらねえよ！」

相変わらず脈絡のない双子を一蹴し、二人もピコピコと曲選び。と、その間にも

曲目が始まる。

「キタキター！ テンションバネエ！」、「ヤッペエ！ 一番はただきだー！」

ノリノリでマイクを取る双子。

ん、いや、ちょっとまって。今、流れてるの男声と女声のデュエット曲なんだけど。

「いくぜー、雷人！」、「まかせろ！ 風刃！」

きゃるん という擬音がつきそうな声で雷人は元気に答え、歌った。

当たり前のように女性パート。

ほかーん

「ら、らららら、雷人！？」

「なあに？」

「何でお前 ナチュナルに女声で歌ってんだよ!？」

「だってー、男声と女声のデュエットじゃん?」

きゃるんと、またも見事な女の子声。思春期の男の子が出す声じゃない。

『じゃんっ』『じゃねえよ、選ぶなよ! 始めから男だけの選べよ!』

「いや、全ての曲を歌えてこそ真のミュージシャンなんだ!」

「そつそつ! 俺達の辞書に不可能という文字はないんだ!」

顔を見合わせて、なー、とつなずき合つ双子。

もつやだ、この二人。

「…もつ、タームの連中は色々わけわかんないけど、一番わかんないのは雷人の声帯だよ! どうなってるんだよ! 声変わり起こつたのかよ!」

「ちなみに、二つ高いドまで出せる!」

「胸を張って言うなよ!」

「…雷人、もついいよ、本当のことをいってごらん? 実は女だろ?」

「男だ!」「一卵性だ!」

「いや、実は女だったんだけど、同一を求めるあまりに男だと思ひ込んでいたのか!」

「はっ!」

颯火の言葉に、双子の動きが止まった。

「あ、ありうる…すこく…」な、なんかそれはありそうだ…!」

いや、真に受けるなよ。

「そんな、じゃあ雷人は女だったのか!?!」「か、かもしれぬ!」

「でも男だよな…!」「ヤベエ、なんだか自信なくなってきた…!」

自分の性別にくらい自信を持ってくれ。

「…その時、雷人に小さい頃の記憶が読みがえった。遠い昔、忘れてしまっていた、いや、忘れようとした思い出。自分が、女だった頃の、思い出…」

「おい、颯火、モノローグの真似事はいいが、そろそろ訂正してやれ」

「何言ってるんだよ、葬屋! ついに隠されていた秘密が明らかになるんだぜ!？」あ

の高音はどこからきたのか! それは雷人の過去にあった! よし、完璧だ!」

「うん、颯火。歯あ食いしばれ」

葬屋はそうにつこり笑ってライフルを容赦なくフルスイング。

ここで豆知識。葬屋さんの持つてるアサルトライフルは三キロあるよ!

ドグガシャアツ!

…なんか、すごい音がした。

一方、双子の思考は混迷を極めていた。

「はっ! というか、一卵性なら俺も女かもしれない!」「なんだと、風刃!？」

「あ、でもこれであるそいだな!」「そつだな! 結果オーライだ!」

「パネエ!」「ヤベエ!」

「おい、性別の違いから男と思ひ込んだと言つ設定は何処に言つたんだ?」

『つか、お前等一緒に風呂入ってたから分かるだろうが』

皇月と霜一の冷静な言葉に、双子ははたと手を打った。

「あ、そついえば」「そつだな!」

「なんだ、やつぱり俺達男じゃないか!」「なんだビックリした!」

もつ、突つ込みどころが分からない。

「だれか、こいつらにもつ一回保健の授業を受けさせてください!」

「…きつと、声は頭の年齢に比例してるんだ、そういうことにおこつ」

「葬屋、それより、俺に対して言うことは…?」

「あれ? みぞおち狙つただけ、はずしたか?」

「もつ、お前死ねばいいのに」  
「でも、本当に雷人さんが女の人だったらどうなってるんだろつね、兄さん」

「ただ、この男女比が変わってただけだ。六対一から、五対二に。あ、次俺だ。蒼慈、代われ」

「言いながら、霜一（を憑依させた蒼慈）はマイクを取る。

「あれ、蒼慈は歌わねえの？」

「蒼慈は聞く専だからな。歌うのは俺だー」

「いや、そう言っても、結局どっちも蒼慈じゃねえか」

「ふふん、そつやあ、あんまり口答えするとその舌断ち切るぞオ」

「にっこり邪悪な笑みを浮かべる霜一。マイクを握っていない方の袖から大振りのナイフが見え隠れしているのが見え隠れ。

「チームお抱えの危険人物、互井霜一お兄さん。

「うっかりすると、三分クッキングの材料にされること請け合いです。

「おいおい、葬屋から舌を取つたら、妙に釣りあがった目しか残らないぞ」

「颯火、お前、其処まであからさまに挑発するのは実はマゾだな？」

「あ、何、どついついって、ってちょっと待ったタンマライフは撲殺用の武器じゃドグシャアアッ！

「本日二度目の三キロアタック。颯火の意識が場外ホームラン。

「バックグラウンドではメタルを歌い終えた霜一の次の皇月が『月月火水木金きーんッ』とノリノリで軍歌を歌っていた。

「やはり軍歌はいいな！ 歌うだけで士気が上がるようだ。よし、次はとおりやんせにしよう。とーりやんせーとーりやんせー豆が欲しいかそらやるぞー」

「もう何処から突っ込んでいいのやら。チームには突っ込みと頭が足りてない。

「おい、颯火、次俺たちだぞ。そんなところで寝てないでさつさと起きろ」

「あわよくば永遠の眠りにつかせようとしてた野郎に言われたくねえよ！」

「俺は颯火なら目を覚ましてくれると思って、手加減しないで殴ってるから大丈夫」

「何がだよ！？ どこがだよ！？ 俺もお前の頭も大丈夫じゃねえよ！」

「曲が始まるというのにくだらない痴話喧嘩を始める二人に、霜一は言った。

「何で二人ともマイク持ってんだ？ デュエット曲でもないのに」

「もちろんハモリ用に決まってるだろー！」

「一人じゃ音が取れないんだよ悪いか！」

「当然とばかりにキツバリ答える葬屋と颯火。

「相変わらず一人じゃ何も出来ないようだった。

「と、二人が歌いだそうとしたその時。

「うわあああああああッ！ こんにちはおおおおおおおッ！」

「バタアン！と、勢い良く扉を開けて琴樹がやってきた。みっともなく号泣しながら、憎憎しげに顔をゆがめている。ただならぬ雰囲気です。

「どうした琴樹！ 何かあったか！？」

「うああ、リンが、リンがあ、友達のせつかくの遊びの誘いを断ってくるなんて、コトってばひどいわ。そういう人、私は嫌いよ。っていうんだッ！ 僕お前等と友達なんかじゃないのにッ！ ふざけんなよな！ でも、そんな勘違いするリンも可愛いから仕方なく来てやったよッ！ とりあえずお前等死ねよ！」

「突然やってきて酷い言い草である。しかも結局凜絡みかよ。

「え、つまりなんだ？」「琴樹を泣かしてるのは俺達か？」

「謝れよ、二人とも！」

「なんで俺達なんだよッ！」

「俺達はむしろ被害者だろッ！」

「そうだ！ お前等がいなかったら僕はキンディネスでリンとつふふあははなバラダ

イスだったんだよ！ その馬鹿二人が校舎破壊とかやらかしてキンディネスに飛ばされてくるからいけないんだ！」

「はあ！？ 手前、調子に乗ってんじゃねえよ！」

「そもそも、お前が大量に悪言生成とかしてるから目えつけられんだよ！」

「それはお前等が『本音は大切だぞ』って格好つけて言うから…」

「だからって、お前は本音出しすぎだ！」

「それに俺達は格好つけてなんかない！」

「いや、葬屋と颯火は格好いいぞ！」「俺達にだって色々言ってくれたもんな！」

『ああ、俺にもくっさい台詞を真顔で吐いてくれたしな』

「それで兄さんは死にかけたけど…」

「え、何、お前等、あんな恥ずかしいこと色んなところでやってんの？ うわー」

「は、恥ずかしいと言っくんじゃねえ！」

「俺達はその場をどうやりすこすかで必死なんだよ！」

「ほほう、そんなに説教が好きなら、私や鷲と一緒に連行班に入るか？ 馬鹿共を言

葉巧みに言いくるめるのは楽しいぞ」

「絶対に嫌だ！」

「皇月と一緒にコトがもう嫌だ」

「何だと！？ 失礼な！ この完璧な柏皇月の何が不満だって言うのだ！」

「全部」

「というか、皇月！」「葬屋と颯火は俺達の鎮静班に入るんだぞ！」

「そしてバンドを組むんだ！」

「組まねえって何度も行ってんだろあつ！」

「それにお前等と一緒に絶対嫌だ！」

「こんなに仲良しなのに！」

「仲良くねえ！」

「思い込みだ！」

『ちなみに、鎮静班に入れば、脱走した俺と楽しく殺し合えるぞ！』

「そんな特典いらねえよ！」

「あ、でも僕らと同じ研究班に入るとゼベットの悪言語につき合われますよ。」

「もう変態はつんざりだ！」

「ああもう！ タームなんか入りたくねえよ！」

「往生際が悪いな、二人とも。もう俺なんかとつくとつに諦めたよ」

「さっきまで愛しの彼女のところへ逃避行していた拳句、やってきた途端死ぬのた

まったお前がそれを言っつか！」

「い、愛しの彼女だなんて、えへ、ちょ、ちょっと照れるな…っ！」

「そんなデレいらぬ！ 気持ち悪い！」

「ああ、ちょっと皆さん！ あんまり悪口いっつかから、あ、悪言が！」

「あーっ！ くっそ葬屋、テーマコンボするぞっ！」

「おう、颯火！ テーマコンボ！ 《黒倒》！」

「こら！ こんなところでやったらまた色々壊れるだろうが！」

『ヒヤッハッハッハッ！ 楽しくなってきたねエ！』

ドーンダダダダダガシャーンパリーンズダンバララギューンジャジャジャ

狭いカラオケボックスで暴れまわる七人。

その間、カラオケは鷲の独壇場であったが、無口キャラの貴重な歌声は誰の耳にも届くことはなかった。